

失語症者の就労の可否と神経心理学的検査成績との関連 ～標準失語症検査とウェクスラー成人知能検査の分析から～

北上 守俊^{1, 2)} , 高野 友美²⁾ , 秋山 明美²⁾ , 荻荘 則幸³⁾

※1 新潟リハビリテーション大学

※2 新潟県障害者リハビリテーションセンター

※3 ゆきよしクリニック

要旨

失語症者で就労支援を受けた経験がある者は32.0%で、その内病院で受けた者は1.0%と僅かな状況である。失語症者の復職率は、約20～40%とする報告が多く、半数以上が就労に至っていない。これまでに、失語症の重症度や分類などについて就労群と非就労群を比較した研究は散見しているが、神経心理学的検査の成績を比較した研究は少ない。そこで本研究では、標準失語症検査とウェクスラー成人知能検査の動作性検査について就労群と非就労群の成績を比較検討した。その結果、失語症者の就労群と非就労群の標準失語症検査の下位検査26項目の成績に差はなく、ウェクスラー成人知能検査の動作性検査の合計と下位検査「積木模様」に差があることが明らかとなった。失語症者の就労支援を実践していく上で、言語面だけに着目するのではなく、問題解決や同時処理の能力を評価及び訓練に取り入れていくことが重要であると考えられる。

キーワード

失語症, 就労支援, 神経心理学的検査

2018年3月発行の新潟県作業療法士会学術誌に投稿